

<論文>

前古典期アッティケーのトレイス・スタセイスを考えるために

上野慎也

《はじめに》

「当方に兵員を載せた艦船二百隻がある限り、我々には貴公らを凌ぐポリスも、領域もあるのだ」¹。サラミースの海戦を控えたギリシア方の軍議の席上、ポリスをもたぬ者は意見を述べることも、議決に加わることもまかりならぬと詰られたテミストクレスは、すかさずこう啖呵を切ってやり返す。敵軍迫るの報に、一部の例外を除いて住人の退去したアテナイは、このとき既にクセルクセスの手に落ち、アクロポリスもペルシア軍によって蹂躪され、火を放たれていた。その状況を指して放たれたアポリス²、すなわちポリスをもたぬ者という侮言に対して、ポリスという語のもつ多義性——ここでは大まかに両義性といってもよい——を逆手にとった当意即妙の反駁である。「ムラ」という言葉がそうであるように、「ポリス」も一語にして或いは居住地の外的、景観的な側面を強調し、或いはそこに張り巡らされる人的結合を色濃く含意し、また往々にして双方分ち難い微妙なニュアンスを醸し出す。この逸話こそ、なによりもこの間の消息を雄弁に物語っている。

しかし、曰く言い難い複雑、微妙な含みの一方を失った状態で、なお自らにポリスありとするテミストクレスの用法は明らかに異常であり、そのものいいは強弁を通り越して頗知めいてすらいる。従来、この箇所からポリスの実体は領域よりもむしろ市民団であると論じられ、ポリス社会の本質と見なされてきた³。実態はともかく、当時の人々、少なくともアテナイ人が自らの社会をそのように観じていたことは十分考えられる。しかしそうしたポリス観自体、侮辱者のアポリスという語の使い方を見る限り、当時一般の通念であったとは見なし難く、むしろ社会を律し、再生産していく上での理念に近いものであったと言えそうである。テミストクレスの啖呵は、その鮮やかな機知ともものいいの異常さ、そして異常でありながらも人々に訴えかけ、共感を得るような理念ゆえに——その理念は理念と意識され、広く社会に共有されていたのであろう——、ヘーロドトスによって記録され、伝えられたとは考えられないだろうか。この啖呵が平々凡々なポリス観の吐露であったとすれば、そもそも彼に対する辱めなどはあり得なかったはずである。

テミストクレスのポリス観が現実の投影ではなく、むしろその逆であるということは、その観念が特定の環境の下、歴史的に形成され、社会に浸透していったことを意味する。換言すれば、それはイデオロギーである。「ポリス＝市民団（ポリータイ）」イデオロギーの形成過程、それをめぐるものいい、付随する慣習的な行動を明らかにすることで、古代ギリシアのポリス社会をより深く理解できるはずである。

しかし——「ポリス＝市民団」は本当にイデオロギーなのであろうか。ありのままの現実を叙したものにすぎないのではなかろうか。このような疑念が残るのも事実である。ここから、市民団の淵源を考察する必要が生じる。「ポリス＝市民団」が動かし難い事実の陳述であるとすれば、両者を結ぶ等号が前古典期のいずれの時期にあっても成り立たなくてはならない。それを検証する際、重要になってくるのが、ある集団が単なる住人の群ではなく、市民団であるための必須の要件、すなわち市民団を貫徹する原理である。前古典期という古

い時代を考察対象とする場合、法制的な側面はなかなか捉えにくいですが、実体的側面から市民団の要件を極言すれば、ある程度の凝集度とその核たるべき「公」の存在（公私の融合）、核を中心に凝集しているという状況——具体的にはその集団が政治の在り方に有形無形の影響力を行使している状況——ということになろう。これら諸点を勘案しつつ、「ポリス＝市民団」関係の性質を検討するために、ペイシストラトスの僭上にまつわるスタシスを取り上げる⁴。ソローン、クレイステネースの両改革に挟まれたこの時期を考察することは、それらの改革事業が市民団形成途上に占める意義を推し量る上でも何らかの示唆を与えてくれるはずである。

なお、本稿は平成5年度卒業論文として東京大学に提出した「トレイス・スタセイス」を圧縮して概要を記す予定であったが、紙幅の関係上、行論のすべてをおさめきれないため、在来説を一覧、検討し、その欠を補う方法を導くことに重点をおき、結論への見通しを多少なりとも明らかにしようと試みたものである旨、あらかじめお断りしておく。結論に至る後半部のやや立ち入った議論は、別の機会に譲る。

1. 学説の分類

本稿の目指すところは上記の如く学説の検討である。従って、以下に展開される諸説の吟味は、いわゆる学説史とは性格を異にし、経時的に学説の変遷を追うのではなく、それぞれを幾つかの類型にまとめ、その適否を考えるという手順を踏む。検討はやや仔細に互る。あらかじめその類型を示し、議論に見通しをつけておこう。

視点、力点が微妙に異なるとはいえ——したがって分類という手法が適当ではないのかもしれないが——今日トレイス・スタセイスをめぐる行われている議論は、大きく四つに分けることができる。その一は、スタシスを現出した三集団が、異なる国制を理念に掲げる三つの階級にそれぞれ対応するというもので、国制一階級説とも呼ぶべきものである⁵。アリストテレスの著と伝えられる『アテーナイ人の国制』（以下 AP と略記）のスタシス描写⁶を尊重する点ではおおむね一致するが、トレイス・スタセイスをそれ以前のアッティケー社会の描写とどう関連させるかは、各々の史家でばらつきがみられる⁷。

第二に、経済的利害が地域毎に対立するのがトレイス・スタセイスの本質とみる立場がある。国制一階級説同様、AP の記述、とりわけソローンの改革前後のアッティケーの社会状況の描写⁸を尊重し、あわせて考古学的な知見⁹も勘考することが多い。経済構造に何らかの変化が起こり、それが従来とは異なった地域的利害対立の局面を招き、三集団対立の逸話として伝わったとみる。経済構造の変化の性質、その原因については諸説区々である。経済利害対立説と呼ぼう。

第三は地域主義 regionalism 説である。アッティケーの各地域は、統合以前に溯る独立性を前6世紀前半に至ってなお保持しており、地域の長が中央進出を狙って凌ぎを削るという構図を提示する。スタシス成員の階級、職能の地域偏差、集団毎の主張の相違はほとんどなきにひとしいとみなす。

最後に貴族——有力者といった方が正確かもしれない——個人の野心こそがトレイス

・スタセイスの原因であり、本質であるとする一群の説がある。これらは、他の類型の諸学説を比較検討した結果帰着するケースが多く、突飛な発想に乏しい反面、立論の周到さは衆に抜きん出ている。他の学説群が、どちらかといえばトレイス・スタセイスを全アッティケー的な現象にとらえるのに対して、各々の勢力をかなり限定された範囲のものと推測する傾向がある。その推測の根拠、行き着く結論は各人各様である。ここにいう「野心」とは、原語ではピロティーミア、すなわち「誉れを愛すること」で、その含意するところは、必ずしもマイナスイメージのみに限られない。いま、ピロティーミア説と呼ぶ。

以上が大まかな学説の分類である。他にいわゆる珍説の類いがあるが、ここでは措くとして、以下、項を改めて、順次各々の類型の学説を吟味していくことにする。

2. 国制—階級説

トレイス・スタセイスの本質に、異なる国制を理想に掲げる集団の角逐をみる者の筆頭に数えられるのは、他ならぬアリストテレス、もしくは AP の著者である。しかしそのスタセイス描写に階級対立を読みとることは、厳密に言えば少々無理があり¹⁰、また著者にその意図があったと断言するのは少々ためられる。しかし多くの学者がそういう読みをしてきたことは確かである。例えば、Hignett¹¹。国制史という観点で綴られたその著書の中で、トレイス・スタセイスはセイサクテイアの恩恵を蒙り、ティーモクラティアの下で上級公職をねらう資格を手にした新人 *novi homines* と、それを拒もうとする旧来の貴族層との確執であると論ずる¹²。新人側にアルクメオーニダイなどはぐれ貴族が合流し、さらに僭主政をもくろむペイシストラトスが遅れて参入、富裕者への反発、土地再分配を求める機運に乗じて勢力を張り、トレイス・スタセイス状態に至るといふ¹³。

彼はペイシストラトスの集団の「政策」にも言及する。曰く、対外戦略の必要から、アッティケーの統一を揺るぎないものにし、土地所有者を多数創出することでホプリータイの戦列に厚みを増す。統率に不可欠のディクタートルこそがペイシストラトス、というわけである。しかし、このような「愛国的政策」説を唱えるのは時代錯誤である¹⁴。愛すべき「国」がまだ明確な形をとらぬ時期に—— 極端に響くとしたら、愛すべき「国」が明確な形をとっていたと確認せぬままに、と言い換えてもよい—— 「国」の行く末に「国民」の関心を向けることなど、できる相談ではない。国制史ゆえの陥穽であろうか。

Hignett の所説で際立つのは、集団名から所在地域を割り出し、その特殊性、固有の利害を軸に議論を展開するという手法をとらない点である¹⁵。そのため *novi homines* の政治参加が対立の焦点とされることになるのだが、彼らを *nouveaux riches* が土地を購入して地主化した人々とみなす点、この時期に富裕な商人や手工業者は存在しないという自らの主張¹⁶とどう折り合いをつけるのだろうか。セイサクテイアによりなんらかの恩恵を蒙った人々である。それ以前に地主化していると、むしろ被害をかぶる可能性大である。突発的な致富でも想定しないことには、整合的に解釈できない¹⁷。

ゲノス間の貧富の格差と、ギルド、すなわちオルゲオーンの不動産所有権付与の要求が、あるべき国制の相違に反映、鼎立状況を生んだという Hammond の説は異彩を放つ¹⁸。しかし

議論に積極的な根拠があるわけではなく、逆に他の議論¹⁹の根拠、乃至例証として用いられている観が強い。独創性はある程度評価する必要があるが、ことトレイス・スタセイスに関する限り、議論の順序が逆であり、そのまま受け入れることはできない。

Hammond の所説が天馬空をゆくが如き想像力を誇るとすれば、その対極に位するのが Andrewes だろう²⁰。彼は、各々の集団名を長の家郷の所在地に由来するものとみなしつつ²¹、飽くまでスタシスの原因を階級の利害対立に還元する。ペディアコイはアテーナイ近在の富裕な土地所有者層で寡頭政を支持、パラリオイは商業・新興富裕層でソローンの国制を追及。その中には土地を購入して中心市付近に居を構えた成員も含まれ、ひとつのまとまったスタシスと呼べるか否かは疑問であるという。AP などにいわゆるディアクリオイは、ヘーロドトスの伝えるヒュペラクリオイなる呼称の方がふさわしく²²、「山の彼方の人々」、すなわち中心市から直接望見できない地域の人々を指すと解釈。ペイシストラトスが僭主政を企ててその地所（ブラウローン）周辺の人々を募り、そこに都市部の人々が合流して形成された集団であると説く。AP を能う限り尊重し、ヘーロドトスをも加味しながら整合的な解釈を目指すものではあるが、史料の特性の検討をまずして両者を同一平面におき、相補う関係にあると考える点、やや性急に過ぎるといえようか。また、その所説にみられる前古典期における商業の規模²³、不動産譲渡の可否²⁴などは議論が錯綜し、汗牛充棟の様相を呈している問題領域だけに、ただちにトレイス・スタセイスの実態究明に援用するわけにはいかない。各々の集団の成員決定に終始し、その行動の追跡が等閑に付されていること、またその対立状況が全アッティケーに対してもつインパクトの量知が欠如していることにも、多少の不満なきを得ない。

以上、個別の難もさることながら、既に註9で指摘したように、ヘーロドトスはもちろんのこと、AP の記述自体にも、トレイス・スタセイスの成員に階級偏差を認めることは難しい。従って同書を尊重、整合的解釈を目指す国制－階級説は、ここで検討する限りにおいては、その根本に矛盾をはらんでいるといわざるを得ない。

3. 経済利害対立説

かかる旗幟を初めて鮮明にしたのは French である²⁵。彼はアッティケーを東西に二分し、中心市付近の平野（含エレウシース）とその他の地域が、サラミース島の獲得により、経済構造にいかなる変容を蒙ったかを考える。東西両地域はヒュメットスなどの山塊によって相互の陸上交通が阻まれており²⁶、メソゲイオンやマラトーンの沃野、またブラシアイを中心とする数多の港湾を擁する東部は、農業、海上交易によりかなりの人口を引き付けていた。海上ルートの確保がままならず、西部に穀物などの船荷を回航させることができなかったことも東部隆昌の一因であるという。ところが、サラミースという小島をひとつ掌中に収めたことで、海上航路の安全が確保され、新たに中心市に近いパレーロンが外港として急浮上し、東部諸港の繁栄が西方に移動する。それにつれて船荷の集中しはじめた西部に大量の人口が吸引されてゆく。衰頹一方の東部地域の利害を代表して起ったのがペイシストラトスだといえるのである。

彼は船荷の主たるものに穀物を考える。人口が大量に移動した結果、過疎化した東部に従来通り穀物が流入して価格が暴落、経済が破綻するという²⁷。しかし破綻しているのは、むしろ彼の所説そのものではなかろうか。彼の主張する東西陸上交通の不通という前提がなければ、仮にパレーロンが西部の外港として擡頭したとしても、それで職や食い扶持にこと欠くような事態には繋がらないから、あえて東部の人々が住み慣れた土地を放棄して移動する理由はない。では、中心市が求心作用を果たしたのであろうか²⁸。しかし往来が自在であれば、元々東部に人口が集中するいわれなどないのである。中心市志向の人々は、はじめから西部に居を構えていたにちがいない。従って、彼の東西独立傾向説に必須の条件は、双方の交通がほぼ断絶していたという状況である。ところが、互いにある程度独自の経済システムが機能している場合、一外港の整備、擡頭が、東部人口を西部に吸引する原因とはならない。French のいう穀物市場としてこの両地域を考えてみよう。まず、東部。輸送システムの欠如により、パレーロンにも回航されるようになった穀物は、西部のみに流通するため、相変わらず東部地域の穀物需要はほぼ同一水準で推移し、市場は活況を呈する。一方西部は、それまで輸入穀物に頼らず凌いできている。逆に、辛うじて自給している地域に、わずかとはいえ穀物が流入すれば、彼が東部の現象として主張する穀価の暴落が西部に惹起される（東部に陸送してさばくことはできない）。西部に人口流入が起こる理由が曖昧なものとなり、東部の穀物市場の崩壊の根拠もなく、むしろ人口を引き付けるべき西部に経済的な破滅が出来ることになってしまう。French 最大の創見たるべき東西経済の独立傾向と、パレーロン・インパクトは、互いに *sine qua non* の関係にありながら、議論全体としてはむしろなくもがなという皮肉なねじれ構造を露呈している。

しかし、トレイス・スタセイスの考察にサラミースの掌握という視角を導入したことは、創見破綻の欠を補ってあまりある貢献である。Hopper の参入により²⁹、議論は新たな局面へと発展する。彼はあらかじめヘーロドトス、AP 双方に伝わる三集団の地域性を吟味、唯一中心市周辺の平野のみが確定可能であるとした上で³⁰、穀物輸出市場を欲したペディオンの人々（ただし、彼の術語ではいわゆるパラリオイもここに含まれる）が、その他の人々と穀物市場としてのサラミース、アイギーナをめぐる利害を異にしたと論ずる。この地域の人々が独自の主張をもっていたことで party 概念が生じたのに加え、僭主政を志したペイシストラトスが支持者を東アッティケーのブラウローンで募ったこともあり³¹、スタシス及びその地域性の連想が完成される。そこに、ソローンの支持母体を決める必要もあって、平衡を保つべく政治的、経済的中間派の人々を想像、ソローンの改革の結果と結び付けられたのだ、と断じる³²。議論を補足して、スタシスはその主舞台が中心市であること³³、固有の商人層の不在・欠落、地域的成員構成偏差観の不適當³⁴、スタシスの長とされる人がペイシストラトス以外にはよく判らず、集団の名に因む「政策」の存在しない点を挙げる³⁵。

サラミースとアイギーナをめぐる利害の対立は、古くは前7世紀後半のキュローン僭上騒動にその根もつという³⁶。ペディアコイ、すなわちキュローン派は、かつての領袖がメガラの僭主テアゲネースの女壻であったことから明らかなように³⁷、メガラと極めて密接な関係を有し、隷属者を抑圧しつつ穀物の余剰生産に勤しみ、これを市場たる両島に輸出する一

方、その領有をメガラ側に認めてもちつもたれつ関係を保っていたとする³⁸。一方、反キュロン派は商業、交易を重視し、中心市アテーナイに近い交易拠点の獲得を目指してサラミース領有を主張、両者の対立状況に至る³⁹。

以上のような推論は、穀物輸入を軸に議論を展開した French とは好対照をなしている。地域性、「政策」の虚を衝き、「政治哲学書 AP」という側面を描き出す労作である。十人アルコーンやその三身分を「空想の産物」と喝破した Gernet と軌を一にし⁴⁰、史料として AP を繙く際のあるべき態度を示唆すること、まことに切なるものがあり、決して過小評価すべきではない。しかし個々のスタシスの動的側面の追跡に欠け、また AP の虚構をあぶりだすことに熱心なあまり、ヘーロドトスの記述の検討をいささかおろそかにし、推測屋上屋を架すといった観が拭えない。

綻びも多い。ペイシストラトスの第一次僭主政が瓦解するときの事情を取り上げよう⁴¹。アルクメオーニダイのメガクレースとリュクールゴス、すなわちパラリオイとホイ・エク・トゥー・ペディウーとが協力して僭主政打倒に立ち上がる。そこには、Hopper のスタシス像との明確な対応関係を証明するのは困難であるとしても、必ずやキュロン派と反キュロン派の協同が見出すことができるはずである。しかし双方の対立の根幹には、当時の社会のタブーにかかわる「血の穢れ」が横たわっており、とても打算で融和できる関係にない⁴²。彼の所説を奉ずる限り、この同盟は解釈不能である。この一事をもってしても、Hopper 説には方法、内容両面で難点が残ることは明らかである。

同じく経済的利害対立説でも、その原因を主に生業の違いで説明しようとするものが、三浦一郎氏の説である⁴³。氏は、パラリオイを—— 少なくともメガクレースを—— 輸出業者、ペイシストラトスを企業的陶器製造業者、あるいはその輸出業者とみなして双方が容易に結び付く要因を探る一方⁴⁴、ペディアコイを山がちなディアクリアー地域にも地所をもち、中央平野での穀物生産の傍らオリーブ栽培を行い、メガラ、アイギーナと取引、貨幣を希求する人々と捉え、やはりパラリオイとの同盟の素地を見出す。ペイシストラトスをラウレイオイン銀山所有者とし、その支持基盤を鉱山労働者とする Ure や、その説を継承した Thomson を批判しつつも⁴⁵、企業的経営者なる観念の影響を色濃く受けている。しかし前古典期の商業規模が把握しにくいことは既に触れたところであり⁴⁶、当時のアッティケーにおけるオリーブの作付状況は、さしあたり確かめる術がない。また、集団の領袖同士の合従連衡とスタシス間のそれとをやや混同している節があるが、果たして事態はそう単純に割り切れるものだろうか。ここにスタシス成員の不在を見出すことはできないのだろうか。いま少し文字史料との対話がほしいところである。

以上を要するに、発想が闊達なだけに、論理的一貫性を実現し難いのが経済利害対立説であるといえようか。

4. 地域主義 regionalism 説

この学説類型の旗手は Sealey である⁴⁷。貴族の対立をスタシスの本質とし、その対立原因として中心市の公職就任の機会が地域毎に均等ではない点を挙げる。アッティケーの各地域

の統合は、ようやく650年代、エレウシースの併合をもって完了したばかりであり、キュロンの反乱は併合間もないエレウシース地域社会の反抗が顕在化したものという⁴⁸。評議会以外の行政機関、権門は統合後も各地域に残存して指導にあたり、中心市とは一線を劃するものであり続ける⁴⁹。ソローンの改革は現行制度の成文化、追認とみなし、地域の伝統と現状を損なうものではなかったと考える⁵⁰。このような状況の下、地域の長たちは、アレイオス・パゴス評議会議員への階梯、アルコーン・エポーニュモス職就任を目指し、各々が個人的な紐帯で結ばれた地域住民の小集団たるスタシスを擁して凌ぎを削る。元来、アルクメオーニダイと反アルクメオーニダイの対立であったパラリオイとペディアコイの角逐に、地方有力者として中央政界に乗り込むべく参入してきたのがペイシストラトスであり⁵¹、これによってトレイス・スタセイス状況が生じたとも説く。

彼はさらに各々のスタシスの地域を割り出していくのだが⁵²、以上の学説の素描に既に深刻なアポリアーが潜んでいる。統合後も地域社会は高い独立性を保持し、ソローンの改革によりそれが追認されているというアッティケー社会にあって、中心市アテーナイの占める地位、優越はいかなる理由によるどのような性質のものなのか。共同体アテーナイの種蒔き人というソローンのイメージを否定する以上、統合後の状況についてさらに推測を重ねない限り、いかんとも答えようがなかろう。そもそも地域の独立傾向を論ずる根拠のひとつ、行政機関の残存、機能は史料からはうかがえぬ話である。また、仮に中心市が何らかの優位を誇り、その掌握が地方有力者にとって垂涎の的であったとしよう。しかしそのための上級公職就任の機会が、果たして中心市以外の有力者が叛乱やスタシスに訴えるほどに閉ざされたものだったのであろうか。ペイシストラトスはその第一次僭上以前に対メガラ戦争を指揮しており⁵³、その際の武勲を口実に僭上に及んでいくのである。ポレマルコスであったか否かは確たることはいえまいが、それにしても胥吏微官の能く及ぶところではないだろう。否、それも問うまい。同説最大の問題は、いかなる学説であれ、多かれ少なかれスタシスの地域的支持という要素を前提に議論している中で、敢えて地域主義を標榜する根拠は何か、ということである。地域主義でなければ説明できない事象や、地域的な支持を俟ってはじめて解明できるスタシスの動きの指摘に乏しく、その分説得力に欠ける憾みがどうしても残る。地域主義説を奉ずる最近の史家に Manville がいるが、彼においてもこの問題は未解決のまま残されている⁵⁴。

5. ピロティーミア一説

古くは Beloch がこの立場をとって AP を祖述し⁵⁵、Ehrenberg がその概説書でやや踏み込んだ素描をおこなっている⁵⁶。しかし検証可能な「議論」としてのピロティーミア一説は、僭主政に関する大著をものした Berve を俟たなくてはならない。彼はトレイス・スタセイスを、貴族が個人の利害に走り、そのまとまりが分裂、崩壊してゆく過程として描き出す⁵⁷。彼は言う。アルコーン・エポーニュモス就任によるポリス掌握は、十人アルコーンの結果不可能となり、代わりにクローズアップされてきたのが、スタシスによる僭上という方法であり、ソローンの改革⁵⁸により境涯の変化した様々な人々と貴族とが結び付くことになる。支持者を集めて氏族(ゲノス)の勢力を拡大し、僭主の地位に指呼の距離まで迫った貴族間の伯仲。

これこそがトレイス・スタセイスであり、そこには集団固有の政治的主張、政策などは存在しないというのである。政策集団としてスタシスを捉えるのは AP、あるいはアリストテレースの抱く国家論的図式に基づくものであり、史実を闡明する上に無益であると断ずる。しかし、彼は同書の記述の具体的検討なしにこのような「断罪」を行っており、それが万にひとつでも史実を伝える可能性を考慮しない。その上ヘーロドトスを利用せぬばかりか、自説の補強に前1世紀のキケロー、後2世紀のプルータルコスを引くのはいささか承服しかねるところである。

Kluwe は紛糾する学説の密林に分け入って丹念に検討し、従来の学説にはスタシスの長たる貴族と、個々の政治、経済、社会的 Fakten との連関に曖昧な点が多く、ソローンの改革による変化から集団乃至党の構成、目的を想定している傾向があると指摘する⁵⁹。続いて彼の打ち出す方法論は、まず社会の実態を究明し、しかる後にそれにふさわしいスタシス像を提示するというものである。「6世紀60年代に成立した政治的『党〔集団。原語：Parteien〕』は、崩壊途上の貴族階級の個別集団に他ならなかった。かかる数多の小集団に、鞏固で長期的な地域的、あるいは社会的支持者を付け加えることにいささかの理由もないのだ」⁶⁰というのが、その結論である。

ところで、インパクトはともかく、時代に絡み付くトレイス・スタセイスという現象をエポケーして、当時の社会の実態を把握することが可能なのだろうか。可能であるとすれば、その根拠は何か。当然考古学的な知見は利用できるだろう。実際、Kluwe の所説の根拠の一翼を担うのが考古学的知見である。しかしその大半は、自らがその方法論を批判した従来の諸学説に依拠して組み立てられた議論なのである。従って、彼の主張に同意する限り、その所説で容認可能な部分は、考古学的知見に基づく一握りの議論である。しかしこれとて、九牛の一毛の如き知見に頼り、推論に推論を重ねたものであり、仮に拠るべきこの知見が、全く当時の社会の本質とは掛け離れたものを語っているとしたら、もはや絶望的である。その方法論はともかく、帰着した結論を文字史料に照らし合わせて検討するという手順が是非とも必要である。しかしより本質的な問題は、トレイス・スタセイスを通して社会の状況を窺視するという——彼自身のそれとは逆の——方法がなぜ考慮されなかったかという点だろう。

ある程度そのような路線に沿って議論を発展させたのが、Stahl の大著である⁶¹。彼は特に一章を割き、前古典期の社会を再構成する上で拠るべき史料は何か、また、それら史料がいかなる特質、偏向を有するかを綿密に検討し⁶²、口承を録したヘーロドトスの重視を打ち出して、AP 独自のトレイス・スタセイス観を前4世紀の政治哲学の所産として退ける⁶³。従来の学説がスタシスを「事件」として捉えていたの対し、スタシスこそ前古典期社会通有普遍の現象、否、社会の在り方そのものであったという視角を提示した上で⁶⁴、ヘーロドトスの記事から読み取れるスタシス像を通じて当時のアッティケー社会の様相を再現してゆく。曰く、各集団にあつて地域的支持者も一定の役割を担うが、全般的に極めて流動性の高いものであり⁶⁵、また対立原因は集団の長の権力欲に収斂するものである⁶⁶。従って、指導者個人の打算で対立状況は目まぐるしく転変する。また彼らは個人的に外国と様々な関係を結ぶ。賓

客（クセノス）関係、奉獻によって贏ち得た神域の信頼、政略結婚などがそれである⁶⁷。錯綜する政治力学で、スタシスは容易に解消せず、むしろ泥沼化の一途をたどるといふ⁶⁸。ヘーロドトス重視に至る彼の精緻を極めた史料批判には、学ぶべき点が多に多い。また、そこから引き出される情報についても、おおむね受け入れることができる。それを高く評価した上で、敢えて難をいえば、そのスタシス像から描き出されるべき社会状況に、二三疑問が残ることである。就中、彼がゲノスについて全面的に Bourriot の見解受け入れ、在来説の検討をまたずにオイコス中心の貴族政ポリス・アテーナイを措定する点は微妙である⁶⁹。前古典期に何の疑いもなくアッティケー地域社会ならぬ「アテーナイ社会」を想定するならば話は別であるが、アッティコイ／アテーナイオイという区別にいま少し敏感であれば、彼の描くスタシス像は別様の解釈をも許容するものではなかろうか。《はじめに》で述べたような旧来の呪縛に搦め捕られ、折角 AP に犀利な分析のメスを入れながら、その著者と同じ土俵の上で凱歌をあげるような愚は避け、イメージとレーアリアの関係をさらに究めて論述していれば、卓絶した偉業だけに、惜しんでもあまりあると感じるのは、独り筆者だけではない。

6. むすび

以上の検討から、従来の学説の偏頗がいくつか浮かび上がってくる。まず第一に、ほとんどの学説が、豊富な情報量のためであろうか、AP の記述をヘーロドトスに優先させ、その整合的解釈に全力を傾注することである。史料としての特質に考慮することが極めて稀である点、すでに Stahl が論破した如くである。執筆時の資料、基本的なプランを検討して史料としての性格を十分明らかにした上で使用法を考えるべきである⁷⁰。さらにいえば、性格如何を措くとしても、その記述をすべて尊重すると、トレイス・スタセイスをめぐる情報に一貫性が失われることも考慮しなくてはなるまい⁷¹。あくまで AP という書物が前4世紀のアテーナイの住人、あるいは一哲学者の前古典期「アテーナイ」観を述べたものであることを忘れてはならない。

それと関連して、アッティコイをただちにアテーナイオイとみなし、その境涯の変遷をたどるといふ同書に典型的な態度は、いま一度検討し直す必要があるのではなかろうか。トレイス・スタセイスから読み取れる社会の在り方、極言すれば民衆の影の薄さ、これが意味するところを、単に貴族政ポリスの上層部の政争と捉えるのではなく、一步ひいて、民衆が動いて防御に当たるべき共同体そのものの成熟度——あるいは有無——から考察する立場も必要になってくるはずである。

ソローンの改革前後に、来るべき市民共同体の種が蒔かれたことは、スタシスの長が中心市の掌握を狙ったことからもうかがえる。しかしそれがただちに、全アッティケーを包含する緊密な共同体の存在を証明することにはならない。仮にそのような共同体の中でトレイス・スタセイス状況が現出したとすれば、その影響は広範にわたり、全社会的な展開を見せたであろうし、それゆえソローンの如き調停という手段も講じられたはずである。思えば、はじめて僭上する際、ペイシストラトスはかつての武勲に免じて「棍棒持ち（コリュネーポロ

イ)」を護衛につけることを認められたのではなかったか⁷²。仮にスタシスが社会的危機であれば、彼らと語らって、いわば不法にアクロポリスを占拠して僭主政を敷くという冒険行為ではなく、調停者の選出という事態こそ最もふさわしいはずである。ペイシストラトスがそれとは異なる道を選んだ経緯、選ばざるを得なかった状況を、トレイス・スタセイスの様相を念頭に考慮することにより、恐らくこの疑問に何らかの解釈が提示できるはずである。そのためには個々の集団の成員の割り出し、推定に終始するのではなく、その具体的な影響力、運動の軌跡を史料の中に追跡するという手続きが不可欠となる。しかし掘るべき史料の価値の論定と、スタシス活動の追跡の実際は、既に本稿所期の目的を越えるものである。

〔追記〕本稿では、諸説を論理的一貫性、ならびに方法論の適否という、いわば形式論理的観点から批判、検討したものであり、個々の発想自体は、思考を豊饒にする可能性に富んだ得難い共有財産として尊重するものであることを付言しておく。

《註》

1: Hdt. VII 61.

2: 本稿におけるギリシア語表記は、機器の性能に制限があるため原則として仮名書きで行い、母音の長短も、音韻として重視する立場から、極力弁じて転写する。帯気音は無気音と区別しない。出典箇所を明記するので、原綴はそちらにあたられたい。いずれもギリシア文字を使えないための窮余の一策、ひたすら御宥恕を乞う次第である。

3: 例えば、伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会、1982年、148頁。

4: その本質を探り、それをよすがに社会の在り方を考えるため、ここで訳語を当てるのは適当ではないが、差し当たり「党派争い」もしくは「幾つかの集団による内輪もめ」とでもしておく。なお、「トレイス・スタセイス」はスタシスに係わった三つの勢力を意味する。AP.13.4がその出典（テキストでは、エーサン・ダイ・スタセイス・トレイス）。スタセイスはスタシスの複数形。トレイス・スタセイスとは、平原の人々（ペディアコイ。ヘーロドトスではホイ・エク・トゥー・ペディウー）と海岸の人々（パラリオイ、パラロイ）、山地の人々（ディアクリオイ、ヘーロドトスではヒュベラクリオイ）の三集団を意味する。ここでは、それらがもつれあう状況をも含意する言葉として用いたい。561/0年、ペイシストラトスは敵対者に危害を加えられたとして、かつて対メガラ戦争で馳せた武名を盾にアゴラーに集った人々から護衛（コリュネーポロイ、棍棒持ち）を獲得、彼らと語らってアクロポリスを占拠する（第一次僭主政）。ほどなくパラリオイの長メガクレースとペディアコイのリュクールゴスとが手を結んで彼を放逐。しかし両者はたちまち不和となり、優位に立つべく、メガクレースは自らの女娼となることを条件にペイシストラトスを召還、ここに第二次僭主政が成立。ところが蜜月も長くは続かず、メガクレースと折り合いの悪くなったペイシストラトスはアッティケー外に亡命、11年に及ぶ亡命生活の後、546/5年パッレーネーの戦いで圧勝してアッティケーに帰還、第三次僭主政が成立し、彼の死後（528/7年）にも政権は二人の息子に継承され、511/0年の崩壊に至るまで、36年間アテーナイを支配することとなる。Hdt. I 59-64; AP.13.5-15. 年代については、Rhodes, P.J., *A Commentary of the Aristotelian Athenaiion Politeia*, Oxford, 1993, pp.191-199.

5: ここでいう「階級」とは、class、classe、Klasse などの単純な訳語で、この立場をとるほとんどの

史家は、この語に深い意味を付与していないといつてよい。例外として Lévêque, P., "Formes des contradictions et voie de développement à Athènes de Solon à Cléisthène," *Historia* 27, 1978 があるが、階級闘争理論に沿って史実を羅列する体のもので、ここで特に検討の対象とするにはあたらない。

6: AP.13.3-5.

7: 具体的には、ソローンの改革 (594/3)、二度のアナルキアー (590/89、586/5)、ダーマシアースのアルコーン職権不法延長 (581/0-580/79)、十人アルコーン (580/79) などの記事を史実とみるか否か、史実だとしても、それがトレイス・スタセイス状態といかなる関係があるのかという点で見解が分かれる。括弧内は年代、すべて紀元前。以下同じ。なお、これらのクロノロジーも色々と議論のあるところだが、いずれも現在通説として行われているものによった。

8: AP.2; 5.1-3; 6.1 (改革前)。改革後の状況は改革事業の記述の中に散見。AP. 5-12. プルータルコスの記事も援用されることがある。Plut. *Sol.* 24.1に伝わる輸出規制法 (オリーブ油以外の輸出禁止) はとりわけ重視される。

9: 黒絵式陶器の隆昌、赤絵式の登場などから、手工業全般の飛躍を推測することが多い。貨幣経済の導入も議論に絡んでくるが、この時期にその導入を想定することは難しそうである。Kluwe, E., "Bemerkungen zu den Diskussion über die drei Parteien," *Klio* 54, 1972, p.115.

10: 史料分析の領域に立ち入り、本稿所期の目的からややそれるが、敢えて一言しておく。ソローンの改革後、AP.13.1-2 によれば、アッティケーのたどった道は註6に掲げた通り、混乱の連続であった。ソローンが一連の改革を通じて実現しようとした目標は、周囲の期待はともかく、アテーナイという共同体が公のもの (ト・コイノン) として営まれることであった。それを貫く原理としてしばしば強調されるのがディケー、すなわち正義であり、「不当に・・・せぬ」という方針である。セイサクテイア、いわゆる国制の整備、法律の成文化などはみな、そのための手段であり、単なる貴賤の対立の調停や、一方の最愚にとどまるものではなかったことがうかがわれる。cf. AP.11. 役人就任基準に財産評価を導入し、抽籤制が考案されたとも伝わる (AP.8.2)。そのような改革の実施にもかかわらず、二度も国制の頂点に立つ役職が空席になり、不法にその職権を延長する者が現れるという事態をどう考えればよいのか。国制の制定そのものが虚構であったという見方も当然成り立つ。抽籤が規定どおり行われれば当選者なしなどという事態にはならないし、AP.9.1にある通り民衆法廷が権能を十分行使していれば、いままじ別の解決法があつてよいからである。一步譲つて、爾余の制度が機能していたために、アルコーン・エポーニュモスなしでも格別不都合をきたさなかつたとしよう。では、なにゆえダーマシアースの僭上騒動を阻止しなかつたのか。十人アルコーンという異常事態を惹起したのだろうか。アルコーンの権能の大きさ、組織だった国家システムの欠如の裏返しとしか考えられないのではなからうか。仮にソローンの改革がすべて実施されたとしても、それが思惑どおりに機能していなかつたのは明らかであり、だからこそ、財産級とは異なる原理の三身分制度に立脚した十人アルコーン体制により收拾を図らざるを得なかつたと考えられる。ソローンの国制を宙吊りにして難局を乗り切つた後も、なおスタシスは続いたと AP.13.3 以下は述べている。580/79年の奇計も、スタシスそのものの終熄ではなく、精々がスタシスのルール (例えば、僭上禁止など) 制定に終始したものと解さねばならない。一方、スタシスの原因のひとつとして、AP.13.2 はアルコーン・エポーニュモス職獲得を挙げる。その選出要件はペンタコシオメディムノイ級、場合によるとヒッペイス級も含まれる。いずれにせよ富裕層でなくてはならない。彼らが榮達を競つただけならばさしたる問題にはならない。そこに階級的な要素を認める場合、ペディアコイはともかく、AP.13.4 にいわれる「中庸の国制 (メ

「セー・ポリテイアー）」なるものを追及する集団、パライオイの成員を説明するのは至難の業である。これをソローンの国制とただちに同定するのは差し控えるとしても、貴賤いずれにも偏らぬ国制の在り方はやはりディケーに基づくト・コイノンである。富裕者以外はアルコーン職に手が届かないため、名分としてかかる国制の追及（ディオークェイン）を打ち出す。換言すれば——如上の考察からも明らかなように——いまだその実現を見ぬがゆえに、スタシスに参加するということになる。しかし、パライオイの一般成員の目標から帰納されるアッティケー社会の状況は、APの他の箇所でも描写される改革後の共同体「アテーナイ」の国制と矛盾してしまう。従って、ソローンの業績を立てる限りスタシスは有力者相互の権力闘争とみなさねばならないし、スタシスにいささかでも階級的要素を想定する場合には、ソローンを民主政の祖と仰ぎ（AP.41.2）、それ以降のデーモクラティアーの変遷を陳べるという同書の基本的な思想と構造を放棄せねばならない。さらに、トレイス・スタセイスの成員を素描する箇所としてしばしばひきあいに出される AP.13.3-5 をやや仔細に眺めると、成員構成の決定はいよいよ困難になる。

	4節以下（トレイス・スタセイス）	3節
パライオイ ペディアコイ ディアクリオイ	中廉の国制追及 寡頭政 長がデーモティコータトス 債権喪失者 出生不純なるもの	なし 国制変革への反動 ← なし 債権喪失者 なし
該当集団なし		ピロニーキアーによる者

AP.13.4 にトレイス・スタセイスという表現が現れる前と後で、その成員決定に関係しそうな記述を抜き出し、対照させると、このような表になる。ディアクリオイすなわち急進派とみなす作者の思惑とは裏腹に、債権を設定できるほどの者であれば、本来のクレーロスの生産力は平均以上でなくてはならないから、債権喪失者（ホイ・アペーイレメノイ・タ・クラー）がスタシスに関与する場合、むしろペディアコイと利害をとともにすると考えた方が自然である。出生云々に関しては、不純（トイー・ゲネイ・メー・カタロイ）という際の基準が判らぬ以上、確たることはいえないが、ソローンの改革が実施されたという AP の前提に立ち、Ruschenbusch, E., *ΣΟΛΩΝΟΣ ΝΟΜΟΙ*, *Historia Einzelschriften* Heft 9, Wiesbaden, 1966 の F75 にみえる帰化法が実際にソローン前後に制定されたと仮定すれば、少なくとも僭主の御稜威にすがる外国人が不法に居留する可能性は排除できる。法が存在しなければ、もとより不法に居留しようもない。以上、APのトレイス・スタセイスの記述に階級的な対立要素を読み込む場合には、ソローンの改革をめぐる評価とも相俟って、なにかと齟齬が生じる。これは同書のトレイス・スタセイスに関する記事に一貫性が欠如しているのを指摘するのみならず、執筆時の資料の利用状況についての貴重な示唆を含むものであるが、それを論ずるのは本稿の埒外である。

11: Hignett, C., *A History of Athenian Constitution*, Oxford, 1952.

12: ibidem, pp.108 sq. novi homines(sic latine) は nouveaux riches とほぼ等しいようである。

13: Hdt.I 59.3. Hignett は、新党派の領袖が政策を公表、その権威を高めている中、ソローンの国制の権褻が目立つようになっていたことも与かって力があつたという。

14: Berve, H., *Die Tyrannis bei den Griechen*, 2Bde., München, 1967, p.542.

15: 例えば、ヒュペラクリオイを単に「蜂の彼方の人々」と解したり、土地への要求の遍在を認めつ

つも、とりわけ旧ヘクテーモロイ稠密地帯であった中心市周辺のペディオオンに基だしく、ここにペイシストラトスの強力な支持基盤を見出したりする。

16 : Hignett, *op.cit.*, p.102.

17 : AP.6.2 にみえる借金の踏み倒しなども考えられようが、事実だとしてもその勢力を過大視するべきではない。

18 : Hammond, N.G.L., *A History of Greece to 322 B.C.*, Oxford, 1986³, p.102.

19 : *ibidem*, p.158. ヘクテーモロイと売買奴隷の境遇の違いを、本来の身分の差で説明しようとするもの。不動産譲渡の許されないゲノスの成員 *clansmen* は、土地からの収益を抵当に設定するため、返済不履行の状態に陥っても土地に緊縛されたまま有力者に従属、支払いを続けてゆく。一方、もともと不動産所有権をもたぬオルゲオーンの成員 *guildsmen* は、動産、妻子、身体を抵当とするため、返済ができなくなると奴隷に落とされたという。なお、富裕ゲノスは寡頭政希求、貧乏ゲノスは土地再分配要求の民主政、ギルドすなわちオルゲオーンはソローンの国制を支持するものとみる。 *ibidem*, p.165.

20 : Andrewes, A., "The Tyranny of Pisistratus," *CAH*² III-3, 1982, pp.392-398.

21 : AP.13.5.

22 : Andrewes, A., *The Greek Tyrants*, London, 1956, pp.103-104; Hdt. I 59.3.

23 : Kluwe, *op.cit.*, p.117; 村川堅太郎「polis を繞る問題」及び「ポリスを繞る問題・Hasebroek 以後の半世紀」、ともに『村川堅太郎古代史論集Ⅲ』岩波書店、1987年所収、が浩瀚かつ周到に概観している。

24 : Manville, Ph., *The Origins of Citizenship in Ancient Athens*, Princeton, 1990, pp.99-123. 文化人類学的手法に基づき、前古典期アッティケーにおける土地所有形態を分析、ヘクテーモロイ、ペラタイの起源と結び付けようと試みる。学説史も手際よくまとめられている。

25 : French, A., "The Party of Peisistratos," *Greece & Rome* 6, 1959.

26 : *ibidem*, p.50. 東部に陸揚げされた船荷が中心市付近の平野にまでもたらされた可能性はないと明言している。

27 : *ibidem*, p.55.

28 : 東部の繁栄を過度に強調する French の立場は、そもそも中心市がアテーナイにおかれ、維持された理由を説明するのが容易ではない。

29 : Hopper, R.J., "'Plain,' 'Shore' and 'Hill' in Early Athens," *ABSA* 56, 1961.

30 : *ibidem*, pp.189-194.

31 : cf. Beloch, J.K., *Griechische Geschichte* I -1, Straßburg, 1912², pp.368-369, praecipue n.3.

32 : Hopper, *op.cit.*, p.207.

33 : *ibidem*, p.201. cf. Cornelius, F., "Die Partei des Peisistratos," *Rheinisches Museum für Philologie* 79, 1930. ただし、後者はペイシストラトスの支持者として都市 *proletarii* を重視。

34 : Hopper, *op.cit.*, p.204.

35 : *ibidem*, pp.201-202. ペイシストラトスの支持者として AP.13.5 にみえる「債権を失ったもの（ホイ・アペーイレ・メノイ・タ・クレアー）」を、「債務から解放されたもの」と解する箇所もここである。通常は前者の解をとるが、原語の「貸借（クレオス）」の解釈、「奪う、取り去る（アパイレイスタイ）」を中動相とみるか受動相ととるかで Hopper の如き読みも成り立つ余地がある。

36 : *ibidem* pp.211-213. キュローンの叛乱の年代は636/5年、632/1年、624/3年説が有力であるが、いずれの説も決め手に欠ける。Rhodes, *op.cit.*, pp.81-82; Day, J.H. & Chambers, M.H., *Aristotle's History of Athenian Democracy*, Amsterdam, 1967, p.162. cf.552/1年説 : Beloch, *op.cit.*, p.369.

37 : Thuc. I 126.3.

38 : 農業生産に乏しく、貿易立国を余儀なくされていたメガラにとり、両島の掌握は海上航路の安全確保を意味し、またキュロン派からの穀物で食料供給を賄うという利点があったということだろう。

39 : Hopper, *op.cit.*, pp.214-216. 前7世紀から前6世紀にかけて、アテーナイ側は度々サラミースを失っているが、それは内部のかかる対立の反映であると想定。キュロン派がサラミース領有を恐れたのは、明言されていないが、按ずるにメガラへの穀物供給ルートを立てられることで自らの農業経営が立ち行かなくなるためか。彼が反キュロン派の利害を表すものとしてソローンの農作物輸出規制法を挙げる意図は、恐らくここにある(同法については、Ruschenbusch, *op.cit.*, F65.)。反キュロン派たるアルクメオーニダイ、ソローンの伝承には海外との接触を暗示するものが多いことにも注意を喚起する。Hopper, *loc.cit.*

40 : Gernet, L., "Les dix archontes de 581," *Rev.Phil.* 12, 1938.

41 : Hdt. I 60.

42 : cf.Hdt. V 72 ; Thuc. I 126.2; AP.1.

43 : 三浦一郎「キュロンとペイシストラトス・ギリシア初期僭主政の支持階層について」『古代史講座11・古代における政治と民衆』学生社、1965年所収。

44 : 以下の概略は、前掲論文116-120頁。パラリオイについては、AP.13.5 の記述「(各集団は)その農業をしていた地域により名付けられた」に矛盾するが、自説の根拠として Meyer、Grotz、Thomson、原随園の諸氏の議論を引く。Glötz, G., *Histoire générale: Histoire greque, tome I^{re}: des origines aux guerres médiques*, Paris, 1948, p.444 はパラリオイを漁師や船頭、交易商といった地域色の濃厚な職能集団とみている。

45 : 三浦前掲論文97頁。珍説として退ける。Ure, "The Origin of the Tyrannis," *JHS* 26, 1906; Thomson, G., *The First Philosophers: Studies in Ancient Greek Society II*, 1955. とともに筆者未見。

46 : 註22参照。

47 : Sealey, B.R.I., "Regionalism in Archaic Athens," *Historia* 9, 1960, in: *Essays in Greek Politics*, New York, 1967; *idem*, *A History of the Greek City-States 700-388 B.C.*, Berkeley/Los Angeles, 1976. 1960年論文の頁引用は、1967年収録版による。

48 : Sealey 1960, pp.18-20. cf.Hignett, *op.cit.*, pp.35-37. 前8世紀統合説。なお、キュロンをメガラと隣接するエレウシースの住人とみなす根拠は、テアゲネースの派したメガラの部隊が、苦もなく彼ら叛徒と合流できたことである。

49 : Sealey 1960, p.19. Thuc. II 15.2 にシュノイキスモスのくだりがある。そこには「[アッティケーの中の] 他のポリスの評議会議場、諸々の役職を廃止して今日ポリスとなっているところ [= 中心市] に唯一の評議会議場、プリユタネイオインを定め」とみえる。彼は評議会に限ってこの伝承を採用するのである。

50 : Sealey 1960, pp.13-14.

51 : 註47のキュローンの例も、ペイシストラトス同様の立場であったという文脈で論じられている。

彼はキュローン叛乱に、市域で独擅的に公職に就任していたアルクメオーニダイに対する地方有力者の感情を読み込み、後に穢れ人たちを裁いたミュローンなる人物が、特に市域から遠いブリュアー区の人であったことを重視する。クレイステネースによるデーモティコン導入をはるかに遡る時期に、このような所属デーモスの記録が残っていること自体、地域主義を裏書きするものであるという。

52 : Sealey 1976, p.123; Sealey 1960, p.16.

53 : AP.14.1; Hdt. I 59. この戦争は前6世紀前半に帰せられる。

54 : Manville, op.cit., p.159. スタシスの起源を前7世紀の地域対立にまで遡らせるブルータルコスの記事を鵜呑みにしてしまうが、これはいかなるものであろうか。cf.Plut. Sol.13.1.

55 : Beloch, op.cit., p.368. この箇所では彼は十人アルコーンならぬ九人アルコーン説を披瀝する。その根拠は AP.13.2 のベルリン・パピューロスにあるとするが、手元の刊本では、そのような異読は姿を消している。Oppermann, H., ed., *ARISTOTELES AΘHNAIΩN ΠΟΛΙΤΕΙΑ*, Teubner, 1968; Chambers, M., ed., *ARISTOTELES AΘHNAIΩN ΠΟΛΙΤΕΙΑ*, Teubner, 1986.

56 : Ehrengerg, V., *From Solon to Socrates*, New York, 1973, p.80. 「[スタシスは] 相も変わらぬ氏族対立 (feuding clans) の図なのであるが、しかし、非貴族層が重要な役割を演ずる新たな社会の発展に貴族が直面するにつれ、貴族階級内部における軋轢はますます深まることとなった」という一文が、彼のスタシス観の要諦をよく表している。

57 : Berve, op.cit., pp.41-47; pp.539-542.

58 : 彼は国制にかかわる改革をダーマシアース事件以後のものとし、そのためにソローンが当時まだ存命であったことを証明すべく、Cicero *Cato maior* 72 の逸話を挙げて Plut. Sol. 30 の伝承を補強する。Berve, op.cit., p.44. 『大カトー』は前1世紀半ばの作であり、これに照らして前6世紀の事情を論ずるのは少々苦しうである。

59 : Kluwe, op.cit., pp.103 sqq.

60 : ibidem, p.124.

61 : Stahl, M., *Aristokraten und Tyrannen im archaischen Athen*, Stuttgart, 1987.

62 : ibidem, Erster Teil: Die Eigenart der Quellen und die Methodik ihrer Rekonstruktion, pp.6-53.

63 : ibidem, pp.66-69.

64 : ibidem, p.60 n.6.

65 : ibidem, pp.63 sqq.

66 : ibidem, p.60.

67 : ibidem, pp.96 sqq.

68 : ibidem, pp.96 sqq.; p.78.

69 : Bourriot, F., *Recherche sur la nature du genos. Étude d'histoire sociale athénienne. Périodes archaïque et classique*, Paris, 1976; Stahl, op.cit., pp.79-83.

70 : 例えば、Day&Chambers, op.cit. 伝承の変容を扱ったものに、Lavelle, B. M., *The Sorrow and the Pity: a Prolegomenon to a History of Athens under the Peisistratids, c.560-510 B.C.*, Historia Einzelschriften 80, Wiesbaden, 1993 がある。ヘーロドトスの記述をめぐる検討も行われている。

71 : 註9参照。

72 : Hdt. I 59; AP.14.1.